News Letter　no.19

ニューズ・レター

日本図書館協会児童青少年委員会 2017.11. 1
ISSN 2188-6067

■　2016 年度児童図書館員養成専門講座

【児童図書館員としての核となるものを求めて】

第 35 回・第 36 回受講生　吉田久恵（福島県立福島西高等学校）

私が第３６回児童図書館員養成専門講座を修了してから１年が経ちました。

最初に受講を志したのは、2011 年 6 月に福島県立図書館資料情報サービス部児童資料チームに配属されて、１年が過ぎた頃でした。東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所事故により、多くの困難と複雑な問題が発生した福島県において、図書館活動、特に児童サービスをどのようにすればよいのか、仕事や暮らしの中で考え、迷う日々が続きました。事業で県内を回りながら、各市町村の図書館員やボランティアをはじめとする、子どもと本に関わる人たちの声を聞き、それぞれの思いや悩みに触れるにつれ、その迷いは徐々に大きくなっていきました。そこで私は、児童図書館員として核となるものを持てば、ふらつかずにそれに向き合っていけるのではないかと考え、解決の糸口をこの講座に求めたのです。受講資格を得た 2014 年に県立高校への異動が決まりましたが、幸いにも職場の了承を得て 2015 年第 35 回での受講がかないました。しかし母の発病と入院、それに伴う祖母の介護により中断。翌年、祖母の葬儀を終えた後、なんとか後期日程に臨み、修了まで漕ぎ着けました。受講を決意してから４年かかりましたが、その分充実した学びとなりました。

講座では、知識や技術の習得だけでなく、議論を通じた問題意識の共有も求められ、事前課題への取り組みも含めて、大変有意義な時間を過ごすことができました。その間、常に感じていたのが、児童図書館員としての基本的な姿勢やその精神を培い広めようとする、先生方の熱意と強い信念です。特に「絵本」の講師であった矢野有先生の「図書館員は、本を選ぶことをやめてはいけない」という重い言葉は、決して忘れることができません。

このような環境で学ぶうちに、私は、児童図書館員として今後どのように歩んでいきたいのかを、より真剣に考えるようになりました。講座終了直後は、濃密な講義内容と、受講生それぞれから受けた刺激にただ圧倒され、自分が目指す方向を見出せずにいましたが、月日を重ね、意識して仕事を見直すことで、ようやくある思いにたどり着くことができました。それは、子ども一人ひとりの本との出会いを大切にし、それに真摯に取り組むことで、図書館や本に対する信頼に結びつけたい、そのためには、質の良い仕事を着実にできるようになりたいという意欲と、このことに共感し、経験を共有できる仲間をもっと増やしたいという願いです。この思いに気づいてから、県内の熱心な児童図書館員との交流に、今まで以上の敬意と感謝、喜びと勇気を感じています。「乳幼児サービス」の講義において、浦安市立中央図書館の島本まり子先生からあった「スピリットを持ち帰る」という発言の意味を今はよく理解でき、まさしくその通りだと実感しています。

現在、福島県の状況もさることながら、世界が大きく揺れ動いています。このような中でも子どもたちは毎日成長しています。だからこそ、図書館はしっかりと子どもたちのそばになくてはなりません。どのような状況にあっても、児童図書館員であり続ける意志を持ち、この講座から受け継いだものを力に変えて、その務めを果たしていこうと思います。

【児童サービスの視野が広がった 15 日間】

第36回受講生　菅　美幸（葛飾区立お花茶屋図書館）

私が勤めるお花茶屋図書館の児童室は、学校が夏休みに入った今、たくさんの子どもたちで毎日にぎわっている。宿題のドリルをテーブルに広げて奮闘している子も多い。その様子を見ながら、私も1年前の今頃は、夏休みの宿題がある小学生の気持ちをうん十年ぶりに思い出しながら、養成講座の課題に取り組んでいたことを思い出す。

お花茶屋図書館は、葛飾区で3番目に開館した図書館であり、今年 2017 年に 40 周年となった。そんな記念すべき年を迎える館で、自分は児童担当として、一体何ができるかと考えていたときに、この講座を受講する機会をいただけた。多くの方々に応援していただき、職場の同僚たちにもたくさん協力してもらい、無事に最後まで受講できたことを、今でもとてもありがたく思う。

養成講座を前期・後期と 15 日間受講して、各講師の方々のお話を拝聴し、私は自分の児童サービスの視野を大きく広げていただいたように感じる。押樋先生の「図書館の魅せ方」では、「カウンターは整える、子どもの忘れ物を放置しない」「装飾には賞味期限がある」などの具体的なご指摘にドッキリし、自館の環境を見直す機会をいただけた。宮川先生の「日本の児童文学」では、児童室の書架に並ぶ数々の物語が、日本児童文学史の流れのどの時点で生み出されてきたのかを把握することができた。塚原先生の「科学の本・科学あそび」では、子どもたちに空気を使った実験を試しに行ったところ、とても反応が良く、科学の本もたくさんの貸出があり驚いた。今回の講座を受けたことで、日ごろ慣れた図書館の現状を改めて客観的にとらえ直し、改善点を知ることができた。そしてさらに、新たな視点や可能性も教えられた。

そしてもう一つ、今回の講座で自分にとって大きかったことは、この講座をご一緒した他の受講生の方々との出会いである。たくさんの課題を、次々迫りくる〆切に怯えながらこなしていくのは想像以上に大変だったが、その課題を乗り越えて日図協に集まった 17 人の同期生の方たちは、みな志が高く、そのような児童図書館員の方々と 15 日間一緒に学べた時間は、言葉にできないくらい充実したものだった。後期は「ブックトーク」や「ストーリーテリング」など受講者が実演する講義が多かったが、17 人の実演をじっくり聞かせていただけて、大変勉強になり、とてもありがたかった。今も、書架に並んだ本を見て「これは〇〇さんがブックトークをしていた本だ」と思い出したり、「〇〇さんが語っていたお話を今度覚えてみよう」と考える。島本先生の「乳幼児サービス」の講義後に、日図協近くのお店に入って、みんなでわらべうたを教え合った時間は、本当に楽しく、特別な時間だった。この養成講座の 15 日間は、長くて短い、濃く楽しい日々だった。

講座の最終日には、坂部先生がまとめとして、次のようにお話された。「これからそれぞれの立場で考え、児童図書館はこんなことができると伝え、今回学んだことを後につなげていってほしい。」…養成専門講座で学んだあと、自分はこれからどうすればよいのか。また新たなスタートラインに立ったことを感じた。今の図書館で何ができるか、他の児童担当と力を合わせながら、よりよい方向を模索していきたい。

終了証を手にした受講生たち

押樋講師の講座の様子

■　2016 年度全国図書館大会

【2016 年度全国図書館大会に参加して】

市川市中央図書館　髙柳　公香

今回、私は皆さんがどんな活動をされているのか学びたくて第５分科会「キラリと光る小さな町の児童サービス」に参加しました。内容は人口 5 万人以下の小さな自治体で充実したサービスを実践している事例発表でした。

報告 1 の神奈川県まなづる図書館は、人口 7,600 人の町で、複合施設の中の図書館です。図書館協議会がなく、「七夕の行事を楽しむ会」では社会教育委員の方々が率先して、笹などの準備している姿が印象的でした。「放課後のいきいきクラブ」の実施や小学校内に図書館の本を返却できる図書館ポストを設置するなど、図書館への親近感を増し、利用を高める工夫がされていました。

報告２の福島県小野町の人口は約 1 万人。坂上田村麻呂などで有名で、「ふるさと文化の館」という複合施設にあります。人員削減のため少人数での複合施設全体の運営に驚きましたが、「小野町　図書と新聞に親しむ条例」により新たな読書推進事業が可能になったと伺いました。新 1 年生に本と図書館バックの配布、県立図書館と地元新聞社の見学など活字の良さを感じる良い機会となる素晴らしい講座も実施されました。

報告 3 の埼玉県三芳町は、人口 3 万人。県内の貸出冊数№1 を 8 年以上も維持し、他の町から相談に来るほど図書館への信頼が厚いです。素晴らしい点は専門知識のある人材だけではなく、読書関連行事を 269 回実施し、延べ 7,177 人という驚異的参加人数です。特に小学生を対象とした「としょかんくらぶ」は会員制で、読み聞かせ・ブックトーク・ブックリストの配布で出席率が高く、ブックリストは、読み聞かせなどで紹介した本だけでなく、講演会のお知らせや卒業メンバーを記載するなど手書き風で温かみのあるものでした。また、行政に図書館をアピールし続けたことが三芳町「よみ愛・読書のまち」宣言などにつながり、図書館への情熱を感じました。

３館とも積極的に子どもと本をつなげる場を提供している姿が印象的で、事例発表後の研究討議では、北海道斜里町の「英語とロシア語の読み聞かせ」など全国各地から参加者の取り組み例も紹介されました。

報告者の方々も行政などへの図書館や司書の専門性のアピールとともに、情報発信の大切さを重ねて訴えておりましたが、地域のコミュニティの中で図書館は、本を読んで楽しくて面白いと感じる、様々な好奇心を満たす重要な場所だと改めて感じました。

また、各図書館が地域と密着した関係を築くために、児童図書館員の力を発揮され、各機関との連携や人とのつながりを創っています。私どもの市川市でも各部署と連携し、本物の土器に触ってみたり、生きた虫がやってくる会などのイベントを積極的に行い、本と子どもたちをつなぐ方法を日々模索しています。参加した子どもたちの生き生きした目を見ると、頑張りがいがあります。ちょっとした工夫でその自治体独自の図書館の在り方が考えられるでしょう。子どもたちに、本の魅力を味わってもらえるよう一歩一歩前進していきたい、子どもたちにもっと本の楽しさを伝えていきたいと勇気づけられる大会でした。

【キラリと光る小さな町の児童サービス】

依田和子（児童青少年委員会委員）

2016 年度は「地域創造と図書館の未来」という大会テーマのもと青山学院大学青山キャンパスで 10 月 16 日に開催されました。私は「第 5 分科会　児童サービス」に日本図書館協会児童青少年委員会委員として参加しました。発表者は 3 館、「キラリと光る小さな町の児童サービス」というテーマで、人口 5 万人未満の神奈川県真鶴町、福島県小野町、埼玉県三芳町の図書館員の方々に自館の児童サービスについてお話しをしていただきました。

児童サービス分科会会場

質疑・話し合いの様子

まなづる図書館は窓辺で本を読みながら海を見晴らせるなど、ゆったりとした気持で過ごせる図書館です。職員が少ない中、行政機関やボランティアと連携をとりながら子ども対象の事業を行うなど顔の見える関係の中、手作り感に満ちた活動をしていると感じました。

小野町は「小野町ふるさと文化の館」の中に図書館、美術館、強度資料館、丘灯至夫記念館、こどもの笑顔広場を含む複合施設で、職員は一人何役もこなしながら学校教育関係機関と連携を図りながら児童サービスに尽力しているとのことでした。

三芳町立図書館は、子どもに良い読書環境を提供できるよう、児童書の選択に心を注いだ児童サービスを展開し、町民との協働による図書館運営を図っていて、本を読み合うことで人々が結びつき、愛と夢と知性にあふれた心豊かなまちとなることを目指し「よみ愛・読書のまち」を 2016 年 4 月 26 日に臨時議会で宣言しています。

3 人の発表者に共通していたのは、当事者意識がとても高いということです。小規模の図書館だからできるということではなく、どんな規模の図書館でも参考になることだと思いました。

■　IFLA 児童・ヤングアダルト（図書館）分科会報告

護得久えみ子（IFLA 分科会常任委員／児童青少年委員会委員）

【第 83 回 IFLA ブロツワフ（ポーランド）年次大会】

第 83 回 IFLA（国際図書館連盟）年次大会は、ポーランドのブロツワフで、Library, Solidarity, Society（図書館、連携、社会）を全体のテーマとして開催された。（2017 年 8 月 19 日～25 日）参加者は、122 ヵ国から約 3100 人とのこと。会場となった百周年記念ホール（Centennial Hall）は、1913 年に建てられたもので、ユネスコの世界遺産に登録されている。

Centennial Hall 前で
児童・ヤングアダルト分科会の委員たちと

ブロツワフ駅舎内の
図書館へとつながるエスカレーター

1. 児童・ヤングアダルト図書館分科会常任委員会

期間中、2 回の常任委員会が行われた。今回は、議長・事務局長・情報コーディネーターの改選の年にあたった。議長はデンマークの図書館員、事務局長はカタールの図書館員、情報コーディネーターはアメリカの図書館員が務めることになった。議題となったプロジェクトは以下の通り。

・児童図書館サービスガイドラインの改訂
　2003 年に出版したガイドラインの改訂は、2015 年度に着手したもの。イギリスの大学研究者が中心になって作業を進め、今回、全体の文案が委員に配布された。これから、内容を確定し、用語解説や質問を整えて年末には IFLA 本部に提出する予定。

・姉妹図書館（Sister Library）
　公共図書館や学校図書館が国を越えてつながるプロジェクト。現在 77 館が登録、そのうち 31 館が他の図書館との交流を行っている。

・絵本で知る世界の国々（World through picture books）
　各国の図書館員に、自分の国の、長くすすめていきたい絵本を 10 冊ずつ挙げ、内容を簡単に紹介してもらうプロジェクト。各国への貸出セットを今後どうしていくかなど、継続のしかたについて、再検討するチームを作った。

・ベストプラクティス（Best Practices）
　世界の図書館での、児童サービスの、さまざまなイベントや取り組みを YouTube で紹介し、情報を共有するプロジェクト。開始から 2 年たったが、投稿数が 24 件と伸び悩んでいる。

広報のしかたなどを見直すチームを作った。
他に、来年度 IFLA 年次大会での分科会の内容などについて話し合いを行った。

2. 分科会
児童・ヤングアダルト分科会は、2 つの分科会を担当した。

①Revised Guidelines and Best Practices
ガイドラインの改訂についての紹介と、参加者との話し合いを行ったのち、Best Practice の取組みの紹介のあとで、日本からの事例報告として、護得久が東京子ども図書館の学校訪問について紹介した。
②Literacy Matters: It Takes a Community to Raise a Reader - Building a Nation of Readers and Creating a Reading Culture
リテラシー、児童・ヤングアダルト、公共図書館、学校図書館分科会の共催。利用者がゲーム作りを通してプログラミングを学ぶワークショップ（フィンランド）、自閉症の子どもが利用しやすい図書館の環境づくり（イギリス）、遠隔地の高校向けの、電子図書館システム（セネガル）国を挙げての読み聞かせの取組み（ポーランド）等、10 の事例発表があった。

■ 巡回展 The World Through Picture Books「絵本で知る世界の国々～IFLA からのおくりもの」

神奈川県立地球市民かながわプラザ（あーすぷらざ）での展示

2016.11 月 19 日（土）～12 月 18 日（日）開催

依田和子（児童青少年委員会）

1998 年に神奈川県立地球市民かながわプラザ（愛称 : あーすぷらざ）という複合施設が開館しました。名前のとおり、多文化共生を目的にしています。縁あって開館当初からおはなし会を中心としたボランティア活動を週 1 回実施していた「かながわこどもひろば」は、絵本こそ世界の国々を知るための強力なツールであるとの考えのもと 2000 年より「絵本で知る世界の国々～展示とブックトーク」という企画を‘あーすぷらざ’のご協力のもとに毎年夏に続けてきました。
企画の概要は、世界を 8 つの地域に分け毎年一つの地域内の国々で出版され日本語訳のある絵本 300 冊ほどを地元の横浜市栄図書館から団体貸出を受けて会場に展示し、あわせて毎日午前と午後の 2 回該当国の絵本を使ってブックトークをしていました。第 1 回目は日本在住の方が多いアジアから始めていき、その後北欧、カナダ・オセアニア、西欧、東欧・中東・旧ソ連、アフリカ・中南米、英国・アイルランド、北米と 8 年かけて世界を一周し、さらに同じ順序で 2 巡目を実施し、2016 年には世界の絵本を取り上を取り上げました
世界には現在 196 の国がありますが、英国・アメリカ合衆国など 19 世紀末から絵本の出版に力を入れている国もある一方、国情により子どもの本の出版などおぼつかない国もたくさんあります。
それでも世界の国々で出版された各国語の絵本の日本語への翻訳版は、世界を見渡してみても群を抜いている状況があります。幼い頃より、それとは知らずに世界各国の絵本にふれることは、子どもたちにとって身近に世界を感じる貴重な機会と言えます。

あーすぷらざでの展示風景

企画を立てるにあたって、毎年まず該当国・地域のブックリスト作りから始めましたが、アフリカ・中近東・東欧・南米の絵本の出版状況を知り、かつ実物を手にする手段は、あまり多くありませんでした。そのころ私は日本図書館協会児童青少年委員会委員になったところでしたが、丁度国立図書館国際子ども図書館職員の佐藤尚子さんも委員をしておられて、国際子ども図書館に世界各国の原書絵本を所蔵されていると教えていただきました。また、カギのかかる展示ケースを持っている公共の施設には貸出できると教えていただきました。さらに丁度その頃日本図書館協会から推薦されて IFLA 児童・ヤングアダルト分科会の委員になったこともあり、毎年世界の国々で開催される IFLA 年次総会に出席し、現地で原書絵本を購入し、また世界から集まった図書館員たちから自国の出版状況を知る機会を得ました。

そんな中で、IFLA 企画として世界各国で読みつがれてきた絵本のブックリストを作成し、情報を世界規模で共有しましょうということになりました。話を進めるうちに、リストだけでなく現物を出版社に提供してもらって「世界の図書館員が選んだ各国 10 冊の絵本セット」を作り、セットを参加国に巡回するというアイデアが浮上し、現在に至っています。

セット作りと並行して、選書基準、それぞれの国の選書方法、選んだ本の解説を載せたブックリスト作りにも取り組みました。当初は冊子体のリストを発行していましたが、参加国が増えたため現在では IFLA 児童・ヤングアダルト分科会のサイト上に載せる形をとっています。

ちなみに絵本セットは 2 セットあって、ひとつは日本の国際子ども図書館（44 ヶ国 365 冊）、もう 1 セットはフランスの国立図書館（45 か国 380 冊）が管理し、世界各国を巡っています。

今回の「あーすぷらざ」での展示は、「あーすぷらざ」の企画のもと、1 か月間広い空間に世界 39 ヶ国の絵本 325 冊が国別にとびとびに展示してあり、展示チラシをあしらった門をくぐった入場者は、気の向くままに各国の展示を巡り歩いて絵本を手に取って楽しむことができるという斬新な構成になっていました。さらにはクリスマスツリーの立体展示やモビールも天井からつりさげられていて、楽しい雰囲気をかもしだしていました。クリスマスツリーに来場者の感想を綴ったメモが添付できるという工夫もこらされていました。

展示にあわせて講演会やブックトークなども催され、かながわこどもひろばのメンバー数人もブックトークに参加し、また来場者の希望にあわせてフロアトークなどもしました。

会場入り口

クリスマスツリーとモビール

日本の展示

スウェーデンの展示

【巡回展 The World Through Picture Books「絵本で知る世界の国々～IFLA からのおくりもの」】が開催された場所は、以下のとおりです。

平成 29 年度（予定も含む）
・京都府立久美浜高等学校：学校図書館　7 月 18 日～8 月 1 日
・高知こどもの図書館：9 月 9 日～9 月 24 日
・甲子園短期大学附属図書館：11 月 18 日～11 月 24 日
・国際協力機構（JICA）沖縄国際センター図書資料室：2018 年 1 月 11 日～2 月 2 日

平成 28 年度
・豊橋市中央図書館、えびの市民図書館、神奈川県立地球市民かながわプラザ、加美町小野田図書館

平成 27 年度
・取手市ふじしろ図書館、秦野市立図書館、枚方市立中央図書館

平成 26 年度
・静岡県立中央図書館、茨城県立図書館、陸前高田こども図書館・うれし野こども図書室～ちいさいおうち、大船渡市立図書館、岩手県立図書館、ゴスフォード市立図書館（オーストラリア）

大船渡市民文化会館での展示

平成 25 年度
・鎌倉市中央図書館、韓国国立子ども青少年図書館、仁川市スホン図書館（韓国）

ご興味がおありの方は、国立国会図書館国際子ども図書館 資料情報課（IFLA セット貸出担当）電話 03-3827-2053（代表）、メールアドレス ml-ifla@kodomo.go.jp までお問合せ下さい。

■ 第 35 回国際児童図書評議会（IBBY）世界大会オークランド大会報告

聖徳大学文学部教授　村山隆雄
元日本国際児童図書評議会（JBBY）会長

2016 年 8 月 18 日から 21 日までの 4 日間、ニュージーランドのオークランドで第 35 回国際児童図書評議会（IBBY）世界大会が、「マルチ・リテラシー社会の文学」（Literature in a multi-literate world）をテーマに開催された。会場はオークランドの中心部に位置するアオテア・センター。60 の国や地域から約 500 名が参加した。

筆者は、先住民の伝統舞踏で始まった開会式、レナード・マーカス氏らによる基調講演「19 世紀後半の拝金主義時代」、2014 年に国際アンデルセン賞を受賞した上橋菜穂子氏も登壇した基調パネル「児童文学における文化の多様性」、分科会では、ノルウェーのハイジ・ボイエセン氏の「障害のある子どもたちのための本」、JBBY 理事の撹上久子氏による「福島の危機の中における子どもたち」、国立国会図書館国際子ども図書館の本多真紀子氏による同館の新館開館を中心とした「国際子ども図書館の取組」等の報告を聞いた。

IBBY 世界大会のハイライトといってもよい国際アンデルセン賞の授賞式では、自身の生活体験に根ざした曹文軒氏の受賞スピーチが印象に残った（画家賞に輝いたドイツのロートラウト・ズザンネ・ベルナー氏は欠席で、ビデオ・メッセージが寄せられた）。曹氏は中国初のアンデルセン賞受賞者である。

開会式

発表中の本多真紀子さん

また、子どもの読書推進活動に貢献した個人や団体を顕彰する IBBY 朝日国際児童図書普及賞は、ラオスの「ビッグ・ブラザー・マウス」（ラオスの作家育成と児童書の出版・普及活動）とイランの「リード・ウィズ・ミー」（アフガニスタン難民やストリート・チルドレンに本を届ける活動）の二つの団体に授与された。

これらの会議に加えて、2 年ごとに IBBY が推薦する子どもの本に選ばれた「2016 IBBY オナーリスト」の本の展示会を見るのも、参加者の楽しみの一つである。日本からは、文学作品部門で岩瀬成子氏の『あたらしい子がきて』(上路ナオ子絵、岩崎書店)、イラストレーション部門で、吉田尚令氏の『希望の牧場』（森絵都著、岩崎書店）、翻訳作品部門で、原田勝氏訳の『ハーレムの闘う本屋　ルイス・ミショーの生涯』（ヴォーンダ・ミショー・ネルソン著、R.グレゴリー・クリスティのイラスト、あすなろ書房）が選ばれている。

大会の最終日には、IBBY 総会がオークランド工科大学で開催され、板東悠美子会長（当時）、鳥塚尚子 JBBY 事務局長と参加した。役員選挙の他、国際アンデルセン賞の審査を巡って、審査員に大量に関連資料を送付することに伴う経済的な負担、先進国と発展途上国の間の印刷に関する力量の差に起因する公平性の問題等が話しあわれた。その結果、審査のスピード・アップを含め、解決策の一つとしてデジタル・ベースでの審査関連資料の送付が提案された。

同大会のプログラムやスピーチなどは、公式ウェブサイト
＜http://www.ibby.org/subnavigation/archives/ibby-congresses/congress-2016/?L=0＞で見ることができる。

また、JBBY の会報『ブック　アンド　ブレッド』Vol.128（2016 年 9 月号）は、本大会報告の特集を組んでおり、上記の曹文軒氏（数年間の日本滞在の経験がある）の会場でのインタビュー記事や上橋菜穂子氏の基調パネルでのスピーチ「物語が見せてくれる希望の光―断ち切る文化と、手をつなぐ文化―」、オープン・フォーラムで提案された IBBY 声明などが掲載されている。是非、ご覧いただきたい。

なお、次回の大会は、「子どもの本とおとぎ話をとおして出会う東西」（East meets West around children’s books and fairy tales）をテーマに、2018 年にトルコのイスタンブールで開催されることになっていた。しかし、本年 5 月、同国の内外情勢が不安定のため、会場をギリシャのアテネ（メガロン国際会議場）に移し、8 月 30 日から 9 月 1 日まで同じテーマの下に、開催するという変更があった。

■　活動報告

１．委員会開催日：（いずれも月曜　午後 2 時～5 時）
2016 年 9 月 5 日、10 月 24 日、11 月 21 日、12 月 19 日、2017 年 1 月 23 日、2 月 20 日、3 月 13 日、4 月 17 日、5 月 8 日、6 月 12 日、7 月 10 日、9 月 4 日、10 月 16 日

２．第 36 回児童図書館員養成専門講座後期：2016 年 9 月 26 日（月）～10 月 5 日（水）
＊10 月 2 日休み
第 37 回児童図書館員養成専門講座前期：2017 年 6 月 26 日（月）～7 月 1 日（土）
第 37 回児童図書館員養成専門講座後期：2017 年 9 月 25 日（月）～10 月 4 日（水）

３．平成 28 年度（第 102 回）全国図書館大会：2016 年 10 月 16 日
場所：青山学院大学　青山キャンパス
テーマ：地域創造と図書館の未来
◎　児童サービス　第 5 分科会　10 月 16 日　13：30～17：00
テーマ：キラリと光る小さな町の児童サービス
平成 29 年度（第 103 回）全国図書館大会東京大会：2017 年 10 月 12-13 日
場所：国立オリンピック記念青少年総合センター
テーマ：まちづくりを図書館から
◎　児童サービス　第 8 分科会　10 月 13 日　13：30～17：00
テーマ：一人一人のための児童図書館サービス
―子どもと本との架け橋―プログラムを考える

４．児童図書館サービス全国調査（集計・編集中）

５．★　IFLA コロンバス大会参加：2016 年 8 月 13 日～18 日
テーマ：連携、協働、コミュニティ（Connections, Collaboration, Community）
場所：アメリカ合衆国オハイオ州コロンバス
当委員会からの参加者：護得久えみ子（分科会常任委員）、塚原博、依田和子
★　IFLA ブロツワフ大会参加：2017 年 8 月 19 日～25 日
テーマ：図書館、連帯、社会（ Libraries, Solidarity, Society）
場所：ポーランド／ブロツワフ
当委員会からの参加者：護得久えみ子（分科会常任委員）、塚原博、依田和子

■　今後の予定

１．児童図書館サービス全国調査（集計・編集）

２．全国公共図書館研究集会（児童青少年部門）
テーマ：一人ひとりの子どもの読書活動を支援するために
―子どもを取り巻く環境・地域と図書館
日時：平成 30 年 1 月 18 日（木）～19 日（金）
場所：大阪市立中央図書館

３．第 38 回児童図書館員養成専門講座前期：2018 年 6 月 25 日（月）～6 月 30 日（土）
第 38 回児童図書館員養成専門講座後期：2018 年 9 月 26 日（水）～10 月 5 日（金）

４．平成 30 年度（第 104 回）全国図書館大会東京大会：2018 年 10 月 19-20 日
場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

■　委員名簿　2017 年 4 月～

浅見　佳子	鎌倉市中央図書館
川上　博幸	元・枚方市立図書館
護得久　えみ子	東京子ども図書館
坂部　豪　（委員長）	元・水戸市立見和図書館
杉岡　和弘	姫路市立城内図書館
鈴江　夏	横浜市中央図書館
高橋　樹一郎	天理市立図書館
塚原　博	実践女子大学
中多　泰子	元・東京都立中央図書館
二井　治美	草津市立図書館
本多　真紀子	国立国会図書館国際子ども図書館
依田　和子	よこはまライブラリーフレンド

日本図書館協会
児童青少年委員会事務局　川下美佐子
Tel.03-3523-0816／Fax.03-3523-0841
メールアドレス　kawashita@jla.or.jp

News Letter no.19　ニューズ・レター
編集：依田和子
発行者：坂部豪
発行：日本図書館協会児童青少年委員会
発行日：2017 年 11 月 1 日